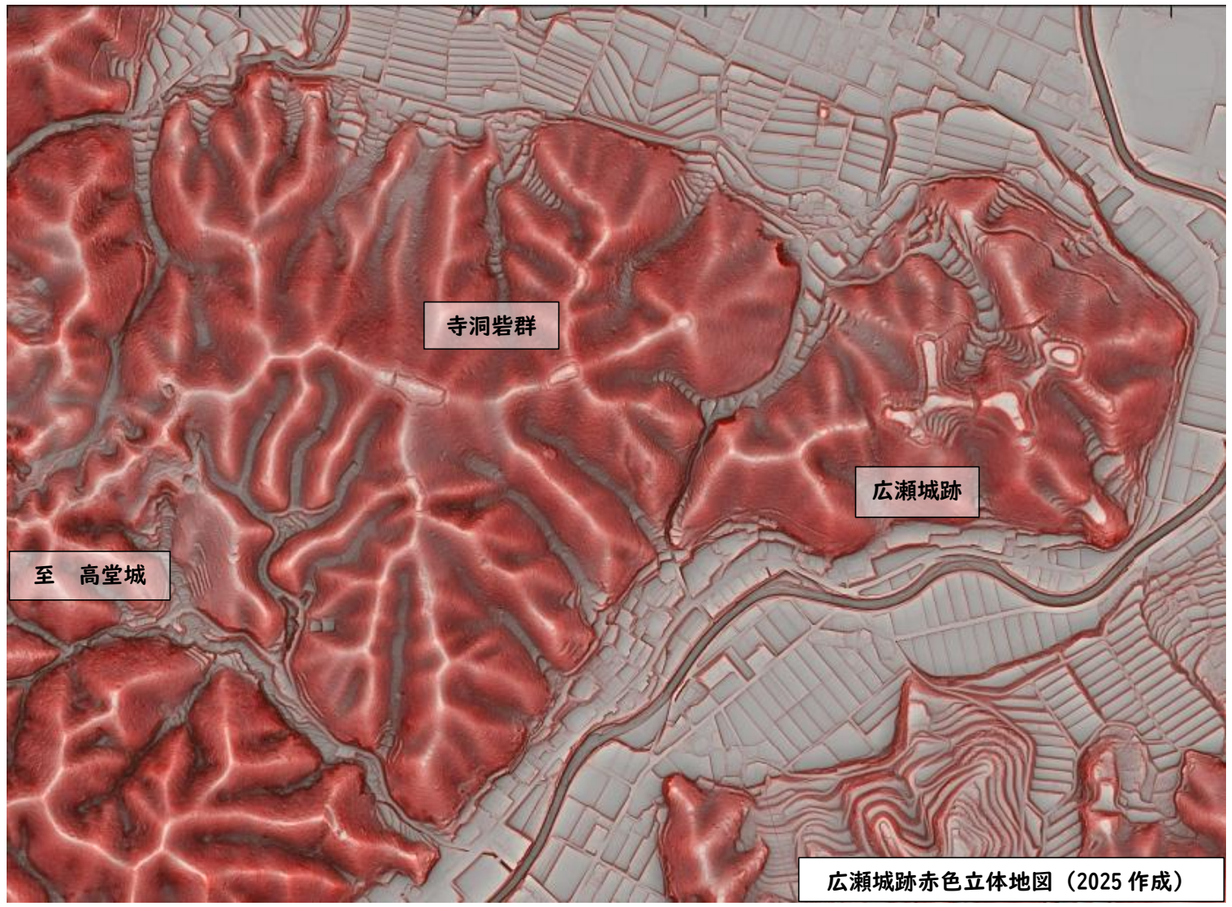
令和８年（2026）４月25日（土）
（雨天の場合　５月２日（土）に順延）

広瀬城跡　現地説明会資料

高山市教育委員会



広瀬城跡赤色立体地図（2025作成）

広瀬城跡の概要

広瀬城跡は、国府町名張、瓜巣にまたがる上城山の山頂に築かれた城です。

江戸時代に書かれた『飛州志』には、「名張村にあり。旧称広瀬の城と云う。広瀬宗城家臣田中与左衛門これを守る。」とあります。城代・田中氏の名から「田中城」とも呼ばれていました。

広瀬氏は、当初広瀬に築いた山崎城を居城としましたが、後に瓜巣の高堂城、そして広瀬城へ移ったといわれています。

広瀬氏は後に三木氏の配下に入りましたが、『千光寺記』や『飛騨群鑑』などによると甲斐の武田氏に通じたとして滅ぼされ、広瀬城は三木氏の城となりました。松倉城を嫡子・秀綱に譲った三木自綱が居城としましたが、天正13年（1585）、金森氏の飛騨侵攻により落城したと伝わります。

『岐阜県中世城館跡総合調査報告書第４集』（2005）では、広瀬城跡に残る畝状竪堀群は三木氏の城に見られる特徴で、金森氏の侵攻に対して設けた防御施設と推定されています。

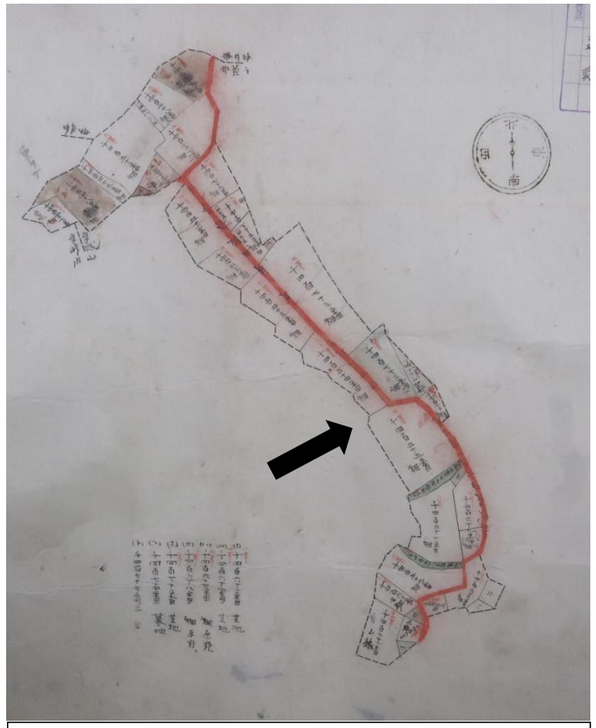
広瀬城跡の遺構

広瀬城跡は、尾根上の東西に二ノ丸、本丸、三ノ丸が並び、三ノ丸と本丸の間に北側へ突き出すように通称「馬場」と呼ばれる平地があります。二ノ丸、三ノ丸、馬場には畝状竪堀群が配置され、特に三ノ丸のものは保存がよく見事です。また、二ノ丸の北側と三ノ丸の西側には大規模な堀切があり、尾根からの侵入に対して防御を固めています。

堀切や畝状竪堀群を防御施設とすること、明確な枡形虎口を持たないこと、曲輪が堀切によって分断されていることなどから、中世の土豪国人の城としての性格が色濃い城跡です。

名張側から谷を登っていく道が大手と考えられています。明治時代の字絵図には、谷の中央を通る道が途中で折れる様子が描かれています。

瓜巣側には広瀬氏の屋敷跡や馬場との伝承がありますが、こちらからの登城道は判明していません。


明治21年(1888)作成　字城洞絵図
矢印部分で道が折れ、城へ入っていきます。

用語解説

【曲輪（郭）】くるわ　山を削って作り出した平らな面。形状から腰曲輪、帯曲輪などがある。

【虎口】こぐち　城の出入口。敵の侵入を防ぐため、直進できない入口や、周囲から攻撃できる設備などがつけられている。四角く囲まれているものを「枡形虎口」という。

【堀切】ほりきり　尾根からの侵入を防ぐために尾根を断ち切るように掘られた溝。

【竪堀】たてぼり　斜面からの侵入を防ぐために縦方向に掘られた空堀。

【畝状竪堀群】うねじょうたてぼりぐん　畝状空堀群ともいう。竪堀を連続して設けて防御力を高めている。

【土塁】どるい　土を盛って防御壁とした施設。曲輪を造成したり溝を掘った時に出た土を盛り上げて造られている。

【礎石】そせき　建物の柱を乗せるための石。

【土師器】はじき　素焼きの土器で、古墳時代から古代には甕や壺、碗、高坏（脚のある器）として、中世では主に杯や灯明皿として使われた。

【須恵器】すえき　古墳時代以降に焼かれた陶質の土器。登り窯で焼かれるため、土師器より硬く青灰色をしている。

【青磁】せいじ　高温の還元炎で焼かれ、釉薬が青く発色した磁器。中国で漢時代に作られ始めた。中世には盛んに輸入され、城跡や寺院跡などの遺跡から多く出土している。

【瀬戸美濃焼】せとみのやき　現在の愛知県瀬戸市、岐阜県美濃地方で作られた陶器。安土桃山時代には黄瀬戸や志野、織部といった名品が作られた。

広瀬氏・広瀬郷関係年表

年号	西暦	出来事
応安５年	1372	飛騨国の山科家領でおきた守護・京極氏の家臣との紛争を治めるよう室町幕府が江馬但馬四郎と広瀬左近将監に命じる。
康暦元年	1379	広瀬郷が醍醐寺理性院（りしょういん）の料所として預け置かれる。
明徳元年	1390	美濃小島合戦で広瀬左近宗勝が戦功をあげる。
応永初め頃		広瀬氏、守護・京極氏と結び広瀬郷を取り戻す。
応永18年	1411	姉小路尹綱（あねがこうじまさつな）討伐令が出される（応永飛騨の乱）。広瀬常登（つねのり）入道が尹綱に味方したため、広瀬郷を没収される。
応永～寛正年間		広瀬郷をめぐり広瀬氏と醍醐寺理性院の間で訴訟が繰り返される。
寛正３年	1462	広瀬氏、広瀬郷を醍醐寺から奪還。
永正17年	1520	広瀬神社棟札に「領主左近大夫将監利治」
天正11年	1583	三木自綱、広瀬山城守を討ち高堂城に入る。
天正13年	1585	金森長近の侵攻により高堂城、広瀬城落城。三木自綱京都へ出奔。

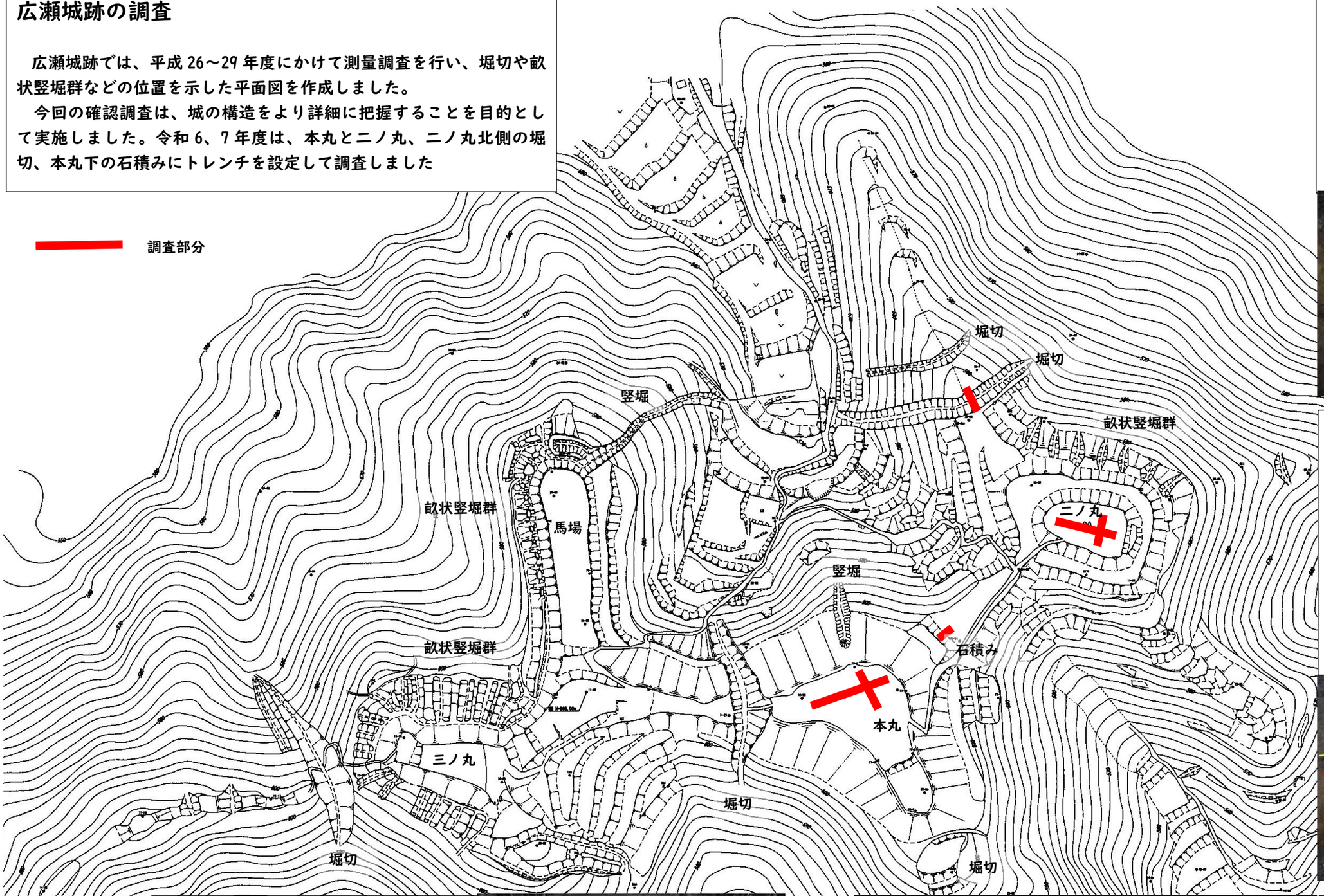
（『国府町史　通史編Ⅰ』『同　史料編Ⅰ』より作成）

高山市教育委員会文化財課
〒506-8555　高山市花岡町2-18
TEL：0577-35-3156　FAX：0577-35-3172
e-mail：bunkazai@city.takayama.lg.jp

広瀬城跡の調査

広瀬城跡では、平成 26～29 年度にかけて測量調査を行い、堀切や畝状竪堀群などの位置を示した平面図を作成しました。

今回の確認調査は、城の構造をより詳細に把握することを目的として実施しました。令和 6、7 年度は、本丸と二ノ丸、二ノ丸北側の堀切、本丸下の石積みにトレンチを設定して調査しました



● 二ノ丸北側堀切

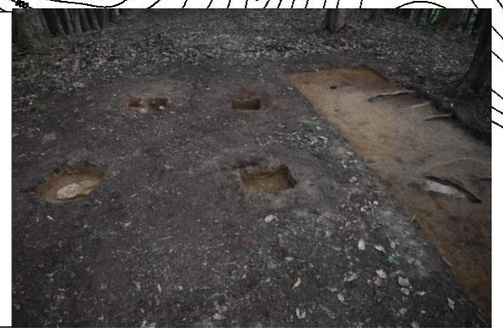
二ノ丸の北側にある堀切の底がどのような形をしているのか調査をしました。現在でもこの堀切は尾根を深く断ち割っているようにみえますが、当初はもっと深かったようです。底には尾根から落ちたとみられる石が堆積していました。

● 二ノ丸

二ノ丸では、曲輪を造成した様子が土層の観察からわかりました。造成した土からは古墳時代の須恵器や土師器が出土しており、城が作られる前には古墳があったことが考えられます。国府町には、山の尾根につくられた古墳が多くあります。二ノ丸では、山頂部にあった古墳を削って平らな曲輪を造成したようです。

● 本丸

本丸では礎石が 2 基確認されました。礎石の周辺では、青磁の碗や香炉の破片が出土しています。青磁は 16 世紀頃の中国で作られたもので、高価な輸入品を使用することができた人物がこの城にいたことがわかります。



● 本丸下の石積み

以前から本丸の東側斜面に石積みがあることが知られていました。今回の調査では、石がどのように積まれているのか、どれくらいの範囲で積まれているのかなどを調査しました。その結果、川原石のような大きな丸石が使われ、斜面に差し込むように石を並べていること、斜面の下には崩れた石が並んでいることなどがわかりました。